

今回の展覧会のために送られて来た諸々の資料類を一覧して、まず強く感じたことがあります。

自分自身のこと、作品の記録、そして自作に関する各方面の反応等が、実に克明に記録されていること、これらは必ず必要なことですが、出来ている人は案外に稀なのです。

この機会に、改めてあなたの経歴を確かめてみました。そして幾つも気付いたことがあります。そこから始めましょう。

第1回の個展を行なったのが1983年。現在のあなたの活動に繋がるアメリカへの最初の旅行がようやく1993年で、そして、その後そこへ居住するのが翌94年だったこと。

これらは何を意味するのか？ それを知るには、あなたの出生年に当たるのが良いでしょう。言うまでもなく、1936(昭和11)年です。1930年代の出生ということになると、総じていわゆる「戦後作家」の過半数を占めている事実には照らすと、活動が1世代以上ずれています。彼らは1950年代の終わりから60年代の初めにかけて、一斉に世上名高い「アンフォルメル旋風」を受け、さらに重ねるようにして襲って来た「ポップ・アートのハリケーン」にさらされて、その間にも直後にも渡米して、何人かは既に活動を始めているのです。

それから30年近い後のあなたのアメリカ発見と居住は、余りにもずれていると言う人がいるかもしれませんが、この事実について、私は良いとかどうとかと言っているではありません。それよりも、これまで良く見えなかったこの30年間で、どうであったのかに注視しているのです。

細かいことは省略するとして、主要な第1は、1660年の日宣美入選です。

歴史を振り返って証言するとすれば、「デザインの夜明け」のこの時代の日宣美の人気は絶大でした。昭和25(1950)年に発足したこの団体は、第3回展から作品公募を始め、その1953年の公募入選作品は121点で、677点からの選抜でした。その後の応募点数はうなぎのぼりでした。点数を列挙すると次のようになります。第4回=1040点、第5回=1566点、第6回=1573点、第7回=2128点。しかし、この程度で驚くのはまだ早いのです。昭和35(1960)年の第10回展では、応募作品は4623点にも達して、24歳の駆け出しデザイナーのあなたは、このような実状のなかでの1人として、プロでも落選するあの厳しいコンクールにがみごと入選して、人気絶頂のスター・デザイナーたちと作品と一緒に並べられたのです。

次に重要な事柄は、63年に法政大学文学部哲学科に入学し、言語化した現代文化を批判する卒業論文を提出して、67年に卒業したことです。

卒業後は、哲学を学んだからと言って、特別の仕事に就いたわけではなく、むしろ、世間的には一段落ちたと言えるマンガ劇画風エロティック・イラストをもっぱら手掛けます。もちろん、これは世間的にはこのように見えたかもしれませんが、実はこの時期、先述の日宣美入選が示すように、田中一光や横尾忠則に続く年代の1人として、グラフィック・デザイナーないしはアート・ディレクターとしての職能を続けていて、その間にこの種のイラストに興味を示して実行もし、ある意味では時代を先取りしていたと言えます。絵画形式の「1枚絵」の試作も行なっていて、71年からは日影眩のアーティスト・ネームも既に使用されていたのでしたね。女性を真下から見上げるアングルが、後に繋がることになります。

これ以降、いろいろな試みがなされて、次第にアートに近付いて、前記の最初の絵画個展を実行するのが83年でした。その2年前、81年の年譜の脇に、ニューヨークとロンドンでニュー・ペインティングが始まるという書き込みが認められるところから、世界の先端の美術動向を、あなたはすべて承知していたものと思われます。同時代人よりも1周半以上遅れたあなたのマラソンは、その分だけ余裕を持ったことになるでしょう。

さて、こうして1人の画家が誕生した地点へようやく辿りついて、なかなかのプロセスだったと思います。なかでも印象的なのは、あなたの卒論を「自分の教授歴中、一番面白い論文。感覚に依っているがその感覚を論理的に説明できるのだから」と評した瀬川行有先生(社会評論家としては福田定良の名前で活動)の一言です。その通り、「優れていた」のではなく、「面白かった」と言わしめたとすれば、あなたは確かに「唯のネズミ」ではなかったのです。

これをもって、いささか長過ぎた前文を締め括り、早や20年に近づくブルックリンを拠点とするあなたがアメリカで切り開いて来た広大な地平について、ほんの2、3のことを記します。この間のことは、余りに多く記録されていて、私には感想を記すだけで充分でしょう。

ほとんど全面的な「フログズ・アイ」、上方に広がる晴天とそれを感じさせる室内、昼夜を問わず、そこに流れるcleanな空気。そのアングルがどんなに急角度だとしても不純なものは一切なく、悪意の生じる暴露性が皆無であること、これは全く異例のことと思います。

それらの画像は、良く知られているように、写真の最高技術を利用して生み出されています。しかし、それに自分の持つ絵画技術のベストを重ね合わせて同一化することで、作品の真の完成に至るのです。

一見写像に何かを若干加えた程度に見え、そう見過ごされる作品が実はそうではなく、何と呼ぶのが適当かは言えませんが、誤解を恐れずに言えば、真の意味での「マティエール」によって絵画になるのだと思います。「マティエール」という一言から、ゴッホやフォーヴィスムを想起する必要はありません。

この点に留意すると、あなたが絵画に本格的に取りかかる前に、様々な職人(アーティザン)の仕事に携わったことがプラスに働き、それが大学で「面白い哲学」を身に着けたことが加わって、今日の日影眩を練り上げたのだと、私なりに諒解した次第です。

日本で最小ながら最リッチな池田20世紀美術館。ここでのあなたの最初のミュージアム展の成功をお祈り致します。